

編集後記

水島裕雅

広島芸術学会も前身の広島芸術学研究会から数えると十三年目に入り、大きな発展を遂げてきた。年報の『藝術研究』も第十二号となり、かなり変化が見られるようになった。

その第一は、大会や例会が充実するにともない、寄稿者が増えたことである。また、レフェリー制度を充実し、大会や例会の発表者の寄稿にも編集委員などの査読をお願いしたことである。内容は一段と充実したはずである。ご一読、ならびにご意見をお願いする。寄稿者が増え、年報が充実することは望ましいことではあるが、

その一方で財政的問題が起きてきている。委員一同も知恵と汗を出し合い、この財政的危機を乗り越え新しい時代を迎えたいと思うので、会員諸氏も会費納入など、ご協力をお願いしたい。

ところで、今回は大会、例会の発表者だけで十一人の寄稿予定者がいた。そのうち大会発表の崔朱延氏の発表（英文）の和訳が間に合わず、また例会発表の末永航氏も次回に見送られたので、九本の論文を掲載することになった。

並木誠士氏、久保田喜美子氏、渡辺浩司氏、石原みどり氏、ウルシユラ・ステイチェック氏の論文は大会での発表に手を加えたものである。また、大山智徳氏、播野尚子氏、児嶋由枝氏、原田佳子氏

の論文は例会発表を中心にしたものである。

また、第十二回の大会は日韓美学研究会と合同でシンポジウム「遊びの美意識」を開催したので、司会を務められた金田晉氏に内容をまとめていただいた。さらに第二回芸術展示「極小と極大展」のまとめを実行委員会委員長の入野忠芳氏にお願いした。

なお、裏表紙の人名表記を最近の学会の人名表記の傾向に従って姓―名の順に改めた。最近の文化庁の世論調査でも、中国人や韓国人のように、姓―名の順を支持する人が名―姓の順を上回ったとのことである。

年報編集委員長を三期務め、年報の形式の変更や執筆要領の制定など、基礎的なことはできたかと思う。レフェリー制度の確立等の課題は残るが、新世紀を前に新しい委員長にバトンをお渡しする。

(みずしま・ひろまさ 広島大学)

藝術研究

第十二号

頒価二〇〇〇円

平成十一年七月十日 印刷
平成十一年七月十一日 発行

編集行 広島芸術学会

〒739-0046 東広島市鏡山一七七一
広島大学総合科学部比較文化研究室気付

TEL 〇八二四―二四一六三三五

or 六三三〇

印刷 (株)ぱぷりカプロモーション

〒733-0013

広島市西区横川新町一五一八
TEL 〇八二―二九三一七三四四